

離れて暮らす親は普段通りに生活している？ 電気ポットを使って見守るサービス

NPO法人パオッコ 〓 離れて暮らす親のケアを考える会 太田差恵子

65歳以上の高齢者で子と同居している人の割合は42・2%（平成23年／厚生労働省）であり、その割合は経年的に減少する傾向にあります。特に既婚の子との同居が減少しています。そして離れて暮らす子としては、別居の親が年齢を重ねるほど、どのようにケアしていけばいいのか頭を悩めることとなります。

NPO法人パオッコには、そんな悩みを抱える子世代が多く集まりますが、「いかに親の異変を察知するか」は大きな課題のひとつです。気遣いから、「子に心配をかけたくない」と考えているお年寄りが多いためでしょうか。健康を害したり、介助を

必要とするようになったりしても、別居の子に相談をしないケースが少なくありません。

そんななか、行政や地域が主体となってお年寄りを見守るサービスが各地で実施されています。また現在では、多数の民間企業も参入しています。

●14年目となる象印の「みまもりほっとライン」

お年寄りを見守る民間企業のサービスの先駆けとなったのは象印マホービンの「みまもりほっとライン」です。平成13年3月、電気ポットを使って、離れて暮らす一人暮らしのお年寄りの生活状況をさりげなくそっと見守

ることをコンセプトにスタート。きっかけは、平成8年、東京・池袋で起きた事件でした。病気の子どもと、その子を看病していた高齢の母親が死後1カ月経って発見されました。そのニュースにショックを受けた医師から象印に「日用品を利用してお年寄りの日々の生活を見守る仕組みができないものか」との相談が寄せられました。

開発されたサービスは、無線通信機を内蔵した電気ポット（名称「iポット」）をお年寄りが使うと、その使用状況（電源を入れた、給湯したなど）が、1日2回、離れて暮らす家族の携帯電話やパソコンにEメールで送



絵・いしだみな / 機カトウプロ

られるというもの。朝、昼、晩と食事の時に使うことが多いポットの特徴を生かしました。設置工事が不要で、特別な操作なく（見た目も普通のポット）普段通りに使うことができるので、見張ったり見張られたりする違和感もなく、親がパソコン操作をする必要もありません。

平成20年には「おでかけお知らせ」機能が追加されました。お年寄りがポット本体の「おでかけボタン」を押すことで、「外出」や「帰宅」を知らせることがで

きます。ポットが長時間使われない状態が、外出によるものか、体調悪化によるものなのか判別できるようにしました。

●親子のコミュニケーションにもひと役

パソコンから「契約者専用ホームページ」にアクセスすれば、1週間分の使用状況をグラフで確認することができます（表示内容は「電源投入」「給湯」「保温中」「外出」「帰宅」など）。それを見ることにより、子は1週間

の親の生活状況を視覚的に感じることが出来ます。

実際に利用するAさん（女性）は「ポットの使用状況によって、親の生活ペースの変化を察知できます。変わってくると、電話をかけて様子を聞いたり、帰省したり。近所の親戚に様子をのぞいてもらうこともあります」と話します。電源のオン・オフにより、朝起きた時間や消灯時間もおおよそ推測できます。

一方、ポットを利用する側の母親を取材したこともあります。

が、「ポットを使うとき、『お茶飲むわよ』と遠方で暮らす娘に声掛けしている感じですよ」と言っていました。毎日のように娘さんと電話で話すようですが、プラスのコミュニケーションとして、サービスを利用してることが印象的でした。

他社サービスも含め無線通信機を用いた見守りサービスの利用者を取材しましたが、サービス利用が親子のコミュニケーションにひと役かっているケースが少なくないように思います。



◆みまもりほっとライン

象印マホービン株式会社
<http://www.mimamori.net/>
問合せ（フリーダイヤル）0120-950-555
携帯・PHSからは0120-145-770

■契約料（初回のみ）

5,250円（税抜5,000円）（iポット1台につき）

■利用料

3,150円/月（税抜3,000円/月）（iポット1台につき）

*iポットはレンタル（新品）です。

*無料で1カ月間利用できるお試しキャンペーン実施中。

「ご利用者から『ポットのおかげで、親の体調悪化を知ることができた』などさまざまなお声が届いています。食事だけでなく、お薬を飲まれるとき、コーヒータイムのとき、お湯割りを飲まれるときなど、生活の中に溶け込んでいるポットを親子のコミュニ

ケーションツールとしてご利用していただければ嬉しいですよ」と象印マホービンの担当者。サービスへの問い合わせは親世帯・子世帯双方から寄せられるとか。40〜50歳代が全体の6割を占めているそうなので、離れて暮らす子が情報収集しているケースの方がやや多いようです。

* *

離れて暮らす親を見守るサービスは、大きく分けてフェイス・トゥ・フェイスによるものと、通信によるものがあります。それぞれ業種ごとの特色を活かしたサービスが提供されています。

どういったサービスが自分たち家族のライフスタイルに合うかをじっくり検討し、生活にマッチした方法を選びたいものです。利用する際は、民間企業のサービスにしる、行政のサービスにしる、親子でよく話し合い、使い勝手や費用負担についても双方が納得して契約することが重要です。